

淵澤能恵の朝鮮女子教育

——淑明女学校設立における日本組合基督教会と朝鮮総督府との関係——

神山 美奈子

1. はじめに

1906年に設立された韓国の淑明^{スミンミョン}女学校(現、淑明女子大学校)¹は、その設立過程において日本組合基督教会(以下、組合教会)会員であり、日本キリスト教婦人矯風会(以下、矯風会)会員であった淵澤能恵(1850-1936年)が大きく関与している。淵澤は、岩手県稗貫郡^{ひえぬき}出身で、養父母のもとで育った。釜石で鉱山技師及び鉄道技師として働いていたアメリカ人バーゼルの帰国に伴って、1879年に渡米しこの一家の手伝いとして働き始めた。淵澤の思いとしてはアメリカで医学を学ぶつもりでいたが叶わず、養母の願いもあり、1882年に帰国、32歳で同志社女学校に入学した。アメリカで生活していた時、彼女はキリスト教の洗礼を受け、日本に帰国してからはキリスト教関係者とも多くの交流を持つこととなる。学費を支払うことの困難さから同志社女学校を中退し、東洋英和女学校、下関洗心女学校、福岡英和女学校、熊本女学校などで教えた。その後、東京で私塾を開くなどして生活したがうまくいかず、お茶の水で文房具店を営んでいたところ、小石川に「東肥義塾」を設立した熊本洋学校の学生たちとの出会いがあった。ここから熊本バンドを中心とするキリスト者との関わりが広がっていったと考えられる。

淵澤と朝鮮との出会いは、彼女がアメリカから帰国する船中で岡部長^{ながとも}職^{おかこ}・抵子夫妻と出会い、朝鮮の視察旅行に誘われたことに始まる。彼等は朝鮮での愛国婦人会朝鮮支部設立³

¹ 生徒募集時には学校名が「普新女学館」、1906年の開校時は「明新女学校」、1909年「明新高等女学校」に、1910年「淑明高等女学校」に、1911年「淑明女子高等普通学校」に改名、1939年「淑明女子専門学校」創立、1948年「淑明女子中高等学校」に改名、1948年「淑明女子大学校」に昇格。

² 幕末までは岸和田藩藩主、維新後には外務省に入り、東京府知事、司法大臣などを歴任。東京番町教会会員であった。

³ 愛国婦人会は1901年に「遺族及び癩兵を救護するため」設立された女性団体。機関紙『愛国婦人』には朝鮮に支部が置かれること(韓国統監府書記官金山尚志「韓国経営と日本婦人」、『愛国婦人』、第106号、1906年11月20日、p.2.)、1906年11月には「韓国における總會」が行われ伊藤統監、長谷川司令官などが列席したことが報告されている。(「韓国に於ける總會」『愛国婦人』、第106号、1906年11月20日、p.5.)この場で伊藤統監が行った演説も記録さ

と女子教育という目的を持っていた。淵澤は朝鮮で目にした女性の置かれた立場に同情し、岡部夫妻の期待を背負って朝鮮での女子教育に身を投じることとなった。⁴ 淵澤は、1905年に朝鮮へ渡り、朝鮮の女子教育に携わることとなったが、日露戦争に勝利を収めた日本はちよほどこの年、朝鮮の外交権を剥奪し、統監府に関する法整備と設置に関する勅令を出した。淑明女学校が設立された1906年には統監府が開庁するとともに義兵弾圧及び大韓帝国の軍隊解散、警察権や司法権等が剥奪され、1910年の韓国併合が着々と準備されていくその渦中に淵澤は朝鮮の地に足を踏み入れた。1906年、菊池謙讓(「1894年『国民新聞』通信員、1898年『漢城新聞』主筆、1904年『大東新報』創刊。明成皇后虐殺に荷担し朝鮮を追放されたが、再び朝鮮へもどる。後に朝鮮総督府から『韓国併合記念章』を受けている。」⁵)などの尽力により^{スヒビ}嚴妃(李朝最後の皇太子李垺の生母)と連絡をつけ、淑明女学校の設立のため^{イジョンソク}李貞淑⁶を朝鮮最初の女性校長、淵澤は学監及び主任教師となった。淵澤はその後30年間この淑明女学校に従事し、86歳でこの世を去る。

淑明女学校は、朝鮮王室や貴族の援助、さらには朝鮮統監府(のちに総督府)と協力体制をとった渡瀬常吉⁷、松本雅太郎⁸などの力を借りて設立、運営されたことが本論文において明らかである。任は、このことについて淑明女学校の教員であった山野上長次郎の文章「当時京城学堂長をして居られた渡瀬常吉氏と現在の淑明財団の幹事たる松本雅太郎氏とが一切の画策をする。外部関係については菊池謙讓氏……見えぬ所に多くの人の多大の努力があった」⁹との内容を引用しながら、最終的に「朝鮮民族が国を挙げて日本の侵略に抗し、

れている。(「韓国支部總會に於ける伊藤侯爵の演説『愛国婦人』、第107号、1906年12月5日、p.1.)

⁴ 任展慧「朝鮮統治と日本の女たち」、もろさわようこ編『ドキュメント女の百年5ー女と権力』、平凡社、1978年、p.112 参照。

⁵ 同書、p.116参照。

⁶ 京畿道の名門李海錫^{イヘソク}の末娘として生まれ、6歳で父を失い、16歳の時に趙寧夏^{チヨニョンハ}と結婚。趙は翼皇后趙氏の甥として高宗即位後に重任され、青年宰相として活躍した。李夫人は、1879年に官職夫人として女性最高の名誉とされていた貞敬夫人の損傷をうけた。1884年の甲申政変時に、守旧派の一人であった趙^{キムオツギョク}は、金玉均派に殺害された。：任展慧「朝鮮統治と日本の女たち」、もろさわようこ編『ドキュメント女の百年5ー女と権力』、平凡社、1978年、p.119。

⁷ 1867-1944年。日本組合基督教会牧師。1885年に八代教会で受洗。90年、熊本英学校教師、89-1906年、朝鮮京城学堂の第二代堂長、1907年、神戸教会牧師。11年、日本組合教会が朝鮮伝道を開始するや、その主任となり、「朝鮮人をよきキリスト者、よき日本臣民たらしめる」との伝道方針により、総督府の援助を受ける。：「キリスト教人名辞典」、日本基督教団出版局、1986年、p.1911。参照

⁸ 『大阪教會要覽：創立八拾周年記念小誌』日本基督教団大阪教会、1954年。の編集者。財団法人淑明学園幹事。1905年末に朝鮮へ渡り京城日報社営業部長となり、韓国併合前後には朝鮮政府と朝鮮総督府に奉職した後辞職。：朝鮮中央経済会編『京城市民名鑑』、朝鮮中央経済会、1921年、p.230。また、娘・下郷喜美氏の回顧談によると、「お茶の水で「梅屋」という文房具店を経営しているときから、能恵は、父・雅太郎のほか江藤哲蔵、菊池謙讓たちのお世話をしました。そうした梅屋に集った学生たちが朝鮮における能恵の教育事業を助けたのです。ところで私の父・雅太郎は徳富蘇峰(熊本バンド支持者でした)の進言で朝鮮に渡ったのです。」：村上淑子『淵澤能恵の生涯一海を越えた明治の女性一』、原書房、2005年、p.149。

⁹ 山野上長次郎、「淑明女学校と淵澤能恵子刀自」、『朝鮮』、第85号、1922年3月；任展慧「朝鮮統治と日本の女た

傾きかけた国運回復につとめていたまさにその時、能恵は朝鮮の女子に日本化教育を行っていたのである。……能恵が『日本の韓国統治とは何の関係もなかった』という『淑明七十年史』の評価には到底首肯しがたい¹⁰と説明している。つまり淵澤は、組合教会や朝鮮統監府と密な関係を持っていた。そこで本研究発表は、日韓両国で出された淑明女学校設立に関する論文等、先行研究を分析し、これら先行研究の一部が課題として挙げている淵澤と組合教会及び朝鮮統監府・総督府との関係を究明することにより、これまで明らかにされてこなかった淑明女学校設立と日本の植民地支配の関係を探ることを目的とする。

2. 先行研究の分析

日本における淑明女学校設立に関する研究成果を保守的、批判的、中立的観点に分けると次の通り。

《肯定的観点》

村上淑子『淵澤能恵の生涯——海を越えた明治の女性——』，原書房，2005年。

《批判的観点》

任展慧^{イムジョンヘ}「朝鮮統治と日本の女たち」，もろさわようこ編『ドキュメント女の百年5——女と権力』，平凡社，1978年。

石井智恵美「淵澤能恵と『内鮮融和』——日本の朝鮮統治下における女性クリスチャンの一断面——」，『基督教論集』第35号，1992年。

江藤伸子「淑明女学校と熊本英学校」，『熊本近代史研究会報』，第345号，2000年。

太田孝子「植民地下朝鮮における淑明高等女学校：抗日学生運動を中心に」，岐阜大学留学生センター『紀要』，2003年。

《中立的観点及びその他》

宮澤正典「同志社女学校と朝鮮」，『同志社談叢』，第17号，1997年。

宮澤正典「淵澤能恵——韓国女子教育に献身した女性——」，『同志社時報』，第130号，2010年。

日本における研究としては、任展慧^{イムジョンヘ}、石井智恵美の研究をはじめいくつかの論文及び書物が発行されている。宮澤の研究に関しては、保守的観点と批判的観点の両方にまたがる中

ち」、p.116.

¹⁰ 同書、p.126.

立的な観点としたが、最初の論文(「同志社女学校と朝鮮」, 『同志社談叢』, 第17号, 1997年.)は村上の著書が出版される前のものではあるが、二つ目の論文(宮澤正典「淵澤能恵—韓国女子教育に献身した女性—」, 『同志社時報』, 第130号, 2010年.)は任の研究を土台としている石井と村上の研究を軸としてなされているため、いずれにしても両者の主張を整理するに留まるという面がある。また、太田の研究は、任と石井の批判的観点を踏襲しているが、新しい観点として、高等女学校の調査、研究を主に行っていることから、植民地化における高等女学校での教育システムについて言及し、このシステムが総督府の管轄下にあったこと、そして淵澤と総督府とが親密な関係にあったことを指摘している。しかし、やはりここでも核心的な問題を提起する内容は見当たらない。石井も「能恵の信仰と天皇制の関わり」などを課題としてあげているように、淵澤個人の研究にとどまらず、淵澤と組合教会をはじめとするキリスト教界及び統監府との関わりを明らかにしていく必要がある。なぜならば、学校設立の背景には彼女が深く関わった組合教会や統監府からの影響があったことが考えられ、そこから彼女自身のキリスト教理解と植民地化政策の接点を見出すことができるからだ。

日本における淵澤に関するすべての研究は、任の論文を土台としていると言えるが、任の主張を全面的に受け継いではおらず、特に淵澤が日本による植民地支配をどのように認識していたかについては見解が分かれる。また、すべての研究が淵澤個人の生涯を紹介し朝鮮での女子教育活動に関する内容が多く、淵澤の周辺にいた組合教会のメンバーや統監府の関係者が及ぼした影響に関する研究はない。つまり、淵澤が淑明女学校を設立する1906年前後の植民地化過程における日韓の相関図を背景に、大きな影響を及ぼしたと思われる組合教会及び統監府との関係を究明するものはこれまでになかった。

また、韓国における研究によると、淑明女子大学から出されている論文については大学ホームページの紹介文からもわかるように全般的に淵澤の関与を積極的に示すことはなく、あくまでも朝鮮の皇室よってはじめられた朝鮮初の民族私学であることを強調する。淵澤は脇役として存在し、そこにはあえて強調しない意図的な意味合いが感じられる一方、淑明女子大学の関係者でない研究論文には淵澤の淑明女学校設立過程での関与を明記し、さらには韓国併合前後の時代背景を考慮しながら淵澤の教育方法について批判的な考察をする。

韓国における研究成果を保守的、批判的観点に分けると以下の通り。

《肯定的観点》

李ソンヒ 「民族の大学——淑明、その伝統の継承」, 『淑大學報』, 第22号, 1982年.

安ヨンヒ 「淑明、民族私学の伝統性を求めて」, 『淑大學報』, 第23号, 1983年.

ジョンクムジュ 「誇らしい雪花紋の母校 淑明女子大学」, 『淑大學報』, 第23号,

1983年.

李ギョンヒ 「民族私学の伝統性と淑明の座標」, 『淑大學報』, 第23号, 1983年.

編集室 「民族私学 淑明の精神と伝統」, 『淑大學報』, 第23号, 1983年.

李ギョンスク 「淑大教育の理念研究」, 『現代社会研究』, 第5号, 1992年.

李ギョンスク 『淑明100年 1906~2006』, 創学100周年史編纂委員会, 2007年.

カンヘギョン 「淑明女校報 同盟休校事件にみる植民地女性教育」, 『韓国独立運動史研究』, 第37号, 2010年.

《批判的観点》

石井智恵美 『淵澤能恵の信仰と行動——日本朝鮮植民地支配と日本女子クリスチャンに
関する一考察——』, 梨花女子大学校大学院基督教学科修士学位論文, 1991年.

ユンジョンラン 「19世紀末20世紀初 在朝鮮日本女性のアイデンティティと朝鮮女性教育
——キリスト教女性 淵澤能恵を中心に——」, 釜山慶南史学会『歴史と経済』
第73号, 2009年.

菅原百合 「日帝強占期 淵澤能恵(1850-1936)の朝鮮における活動」, 東國大学校日本学
研究所, 第35号, 2012年.

現在、淑明女子大学校はその歴史を学校のホームページ上で紹介しているが、その創立に
関して淵澤の存在を明記しないまま、「1906年、大韓帝国の皇室が我国の力で建ち上げられ
た女性教育機関の必要性を感じ、龍洞宮(ドングン)跡に淑明を設立させた。淑明の創学は、
外國の資本に依存することなく、ただ我々の力で起こした民族女性教育の始まりであった」
と紹介している。韓国でも淑明女学校の設立に関しては近年論文が出されているものの、設
立過程における淵澤の存在を明記しているものはほとんどなく、日本人女性関わったこと
を意図的に省略する傾向がある。しかし、淑明女子大学があえて使用しない史料の中には次
のようなものがあることをここで紹介しておく。「市内壽松洞にある淑明女子高等普通學校
は明治三十九年五月二十二日に創立され開校當時には一般女子教育の状態が想像以上に幼稚
であり 書籍教具を學校當局から支給しさらには食費まで擔當しながら彼等を教育した。漸
漸校運は隆昌しつつ同校の創立者である 淵澤能恵氏が嚴妃殿下に女子教育の必要を上達し
時勢事情を斟酌した嚴妃殿下が即時校舍を下付されると同時に經費を 補助し、これによっ
て同校の土臺は築かれ、その後明治四十五年一月に英親王宮のある者が不動産を整理しこれ
を完全なる基本財産として財團法人を組織し、今日のような想像に及ばぬ土臺が固く築かれ
た學校となった。」¹¹

¹¹ 「卒業生을 보내면서 先生님들의 付託, 淑明女高」, 『中外日報』, 1928年3月17日, 3面.それ以外にも、設立

菅原が指摘しているように、韓国における淵澤研究がその生涯や教育活動といった個人的な範疇に留まり、「彼女を取りまく様々な人間関係、彼女が持っていた矛盾する所信と思想の問題、例えば彼女のキリスト教信仰と天皇制に対する奴隸的認識の共存問題、既存のキリスト教会とは異なり日本の色彩を強く帯びている特異な形態を持つ組合教会が彼女に与えた影響に関する問題、彼女と同志社女学校との関係などをより深く考察する必要がある」¹²ある。

3. 日本組合基督教会との関係

菊池謙讓が書いた淵澤に関する回顧談を見ると、京城学堂の渡瀬が彼女の朝鮮での生活のために配慮したことがわかる。組合教会の信徒であった淵澤の朝鮮生活は、組合教会の人々との協力関係の中で始まり、進められた。

女史が京城に来寓されたは明治三十八年夏頃であつた、女史が朝鮮に来られた直前は熊本大江女學校に教鞭を取つてゐた關係から當時京城學堂經營の渡瀬常吉氏が主として女史のために奔走してゐた。同年晩秋の頃、私は壽町川本氏方に於て一木齊太郎氏の紹介で女史に面會し、この因縁を以て女史を朝鮮上流家庭に案内する役目を力めたのである。當時裴貞子の創案であつた日韓婦人會と淵澤女史を中心とした韓國婦人會の二つあつたが、¹³

1906年5月22日に設立された淑明女学校(開校当時は明新女学校)について『婦女新聞』はいち早く「韓国の貴族女學校の設立」と題して次のように報道した。

日韓婦人會に於て貴族女學校設立の議起り嚴妃は大にこれに賛成せらつゝあり同校設立につきて最も關係深きは昨年岡部子爵と共に渡韓せし淵澤能恵子氏にして今後は専ら同校經營の為に力を盡す筈なりと淵澤能恵子氏は(略)韓国の女子教育事業に一身を捧げんの志を起し病癒へん後嚴妃を始め趙夫人李夫人孫夫人等を説きて覺に今日あるをいたしたるなりと¹⁴

に関する記事は以下の通り。「是校は明治三十九年五月に創立された者であるが、朝鮮女學校の嚆矢なる現學監淵澤能恵女史が渡鮮いて以来朝鮮婦人の状態を視察して切に女子教育の必要を感じ女學校設立を計劃し百方に努力していると偶然にも有志からの賛同を得、又計劃を故嚴妃が知ることとなり嚴妃は自費により補助をしたと同時に現校長李貞淑と淵澤能恵両女史に兩班女子の教育を託したことが抑是校の起源である」：「財団法人淑明女子高等普通学校 能爛な書簡と手蹟」、『毎日申報』、1918年2月21日、3面。

¹² 菅原百合「日帝強占期 淵澤能恵(1850-1936)の朝鮮における活動」『日本學』、東國大校日本学研究所、第35号、2012年、p.85

¹³ 菊池謙讓、「淑明女學校と淵澤能恵女史」、『朝鮮新聞』、1936年2月21日。

¹⁴ 「韓国の貴族女學校の設立」『婦女新聞』、第316号、1906年5月28日、p.2。

最も早くに報道されたこの記事を見る限り、淑明女学校設立を主導したのは淵澤であり、厳妃や校長となる李貞淑は淵澤に説得されて快くその任を引き受けたことがわかる。学校創設には韓日婦人会の総裁の立場であった厳妃が形式上、校長に李貞淑、学監及び主任教師として淵澤能恵を任命した。¹⁵ 1906年7月には、明新女学校の宴会が他でもない景福宮内にて開催され、「日本女教師」すなわち淵澤もその場に同席し、¹⁶ 1909年には景福宮内で運動会を開催するほど¹⁷王室・貴族と密接な関係を持つ上流学校として出発した。

これに先立ち、1904年に組合教会の朝鮮伝道の拠点となる京城教会が設立されている。初代牧師は剣持省吾¹⁸で、剣持は機関紙『基督教世界』に度々京城教会の報告を載せており¹⁹、淑明女学校が設立される直前の1906年4月26日には次のように記している。

婦人會も好況にて會員中韓國婦人教育の事に熱注せる者もあり過般来苦心慘憺日韓婦人會設立に盡力せるが着々進捗し居れば遠からず韓國婦人教育の實行を見るに至るべし

20

ここで言及されている「韓國婦人教育の事に熱注せる者」とは淵澤を指していると思われる。これ以外にも淑明女学校設立前に淵澤の存在を「今現に韓國婦人の教育に従事しつゝある日本婦人は二名にしていずれも基督信徒にして我教會又は婦人會に出席しつゝあるなり」²¹と朝鮮の女性教育に従事している日本人女性として紹介した。さらに、剣持は女学校設立翌年の1907年4月11日に次のような記事を載せた。

ラツド博士来韓目下伊藤統監の客としてソントツク邸に滞在せらる(略)博士すでに韓國

¹⁵ 任展慧「朝鮮統治と日本の女たち」、p.119.

¹⁶ 「女徒開宴」、『皇城新聞』、1906年7月23日、1面。

¹⁷ 「女校盛遊」、『皇城新聞』、1909年5月8日、2面。

¹⁸ 剣持は、現、日本基督教団鳥取教会や岡山教会の牧師を歴任した。

¹⁹ 例えば、淑明女学校設立前後の記事を挙げると以下の通り。「韓国京城教會近況」『基督教世界』、第1122号、1905年3月2日、p.3.、「京仁通信」『基督教世界』、第1130号、1905年4月27日、p.9.、「韓国通信」『基督教世界』、第1139号、1905年6月29日、p.11.、「漢城通信」『基督教世界』、第1140号、1905年7月6日、p.9.、「韓国通信」『基督教世界』、第1151号、1905年9月28日、p.9.、「京城通信」『基督教世界』、第1168号、1906年1月18日、p.8.、「漢城通信」『基督教世界』、第1182号、1906年4月26日、p.7.、「平壤所感」『基督教世界』、第1201号、1906年9月6日、p.6.、「韓国通信」『基督教世界』、第1218号、1907年1月3日、p.13.、「韓国通信」『基督教世界』、第1232号、1907年4月11日、p.9.、「韓国通信」『基督教世界』、第1237号、1907年5月16日、p.10.、「伊藤統監と外國宣教師」『基督教世界』、第1243号、1907年6月27日、p.9.、「韓国通信」『基督教世界』、第1251号、1907年8月22日、p.7.など。

²⁰ 「漢城通信」『基督教世界』、第1182号、1906年4月26日、p.7.

²¹ 「京城基督教會通信」『基督教世界』、第1169号、1906年1月25日、p.5.

基督教青年會に於て三回の講演をなし亦明新女学校(王妃總裁の下に淵澤、村井両女史教育の任に當らるゝ貴族女學校)に於て日韓婦人の為講演をなし平壤に赴かれ帰京後當地教會、救育會經濟協會、愛國婦人會其他仁川に於て講演せらるゝ筈なり²²

初代統監伊藤博文の顧問をしていたラッド牧師(米国会衆教會)²³が淑明女学校で講演会を開いたと報じ、統監府の客を淑明女学校に招待し講演を行う関係にあったことがここからわかる。また、劍持以外の筆者によって同じ時期に朝鮮に関する記事が掲載されているが、淵澤に関連して書かれているものは次の通りである。

京城學堂の渡瀬常吉氏、元西の宮の織居氏夫婦等を始め同所に入出する信徒(内地の諸教會に属する人)男女凡そ廿(略)滞在中數回の演説會を開き又婦人會を開く同會には其頃岡部子爵婦人と共に滞在中の淵澤能惠姉も来會せられ殆ど二十名の夫人令嬢會せられて楽しき集なりし²⁴

組合教會の牧師であった原田助の報告だが、ちょうど1905年に淵澤が朝鮮へはじめて渡つた際に淵澤が婦人會に訪れていたというものだ。つまり、淵澤は当時京城學堂の堂長をしていた渡瀬常吉など組合教會の主要メンバーと接触していた。さらには、組合教會が当時の曾根副統監や後に朝鮮総督となる長谷川大将などと交流があったことが次のように記されている。

同牧師(劍持牧師：筆者注)は韓國基督教青年會京城教育會明新女學校(韓國貴族女學校)等に於て宗教々育に関する數回の講演を試み何れの處にても數百名の聴衆あり頗る反響ありし様に候其他東奔西走或は曾根副統監長谷川大将韓國諸大臣を始め日韓上流紳士を歴訪して韓國に於ける斯教の使命を論談し我黨の主張を明らかにせられ候²⁵

淵澤にとってこのような組合教會及び統監府関係者との関わりは教會生活や学校の教師生活において日常的なことであったのだろう。このことを考慮すると、1906年2月1日に統監府

²² 「韓國通信」『基督教世界』, 第1232号, 1907年4月11日, p.9.

²³ Ladd, George Trumble(米国会衆教會牧師)、アンドーヴァー神学校卒業、イエール大学教授を歴任。1892年から1899年まで三度来日。1907年に朝鮮統監伊藤博文の顧問として朝鮮へ渡る。朝鮮を否定的に評価し、日本の韓国併合を正当化した。また、韓国教會と宣教師による獨立運動を批判した。著書としてはIn Korea with Marquis Ito, 1908: 韓国基督教歴史研究所編『来韓宣教師総覧1884-1984』, 韓国基督教歴史研究所, 1994年, p. 336. 参照

²⁴ 「韓國傳道の状況一斑(原田牧師韓國視察報告抄出)」『基督教世界』, 第1141号, 1905年7月13日, p.5.

²⁵ 京城教會一會員「京城だより」『基督教世界』, 第1281号, 1908年3月19日, p.10.

が設置されてから約半年後に淑明女学校が創立されたことも関連性をみせている。

淑明女学校が設立されてから半年ほど後、1906年12月13日の『基督教世界』に渡瀬の個人消息として「朝鮮京城學堂長として久しく韓人教育に従事せられしが同校が政府の管理に移りし結果、辭職の上年末又は新年勿々帰朝せらるべし」²⁶と報じられた。1899年に設立された京城学堂²⁷は私立から官立となり本格的に政府の管轄下に入った。長年、京城学堂の堂長を務めた渡瀬は、日本が朝鮮を植民地化していく過程において「荒療治と云ふ程の事さへないと云ふてもよいのである、固より韓國人の側より云へば中々高壓手段で荒療治であると云へないではない、併し一國の禍根を絶つて之を改善しよふとする時には何れの時代でも多少手荒い療治が必要である」²⁸と日本の侵略行為がやむを得ない手段であったとし、また、その上で政治や教育と共にキリスト教伝道の道が確保されると考えていた。²⁹さらに朝鮮での教育について、アメリカン・ボードの宣教師、J. D. ディヴィスは、「日本が斯くして教育的に政治的に物質的に韓國を補助誘掖するを得ば、即ち日本は同時に自國を助くる者にして、依つて以て極東に於ける自己の權威を確立せしむるを得べき也」³⁰と京城学堂や日本政府が設立した諸学校が朝鮮人のため、さらには日本のために有益であるということを強調している。また当時、番町教会³¹の牧師をしていた綱島佳吉の朝鮮視察談をみると、「統監文治の第一着手は先づ教育制度の改革にある従来韓國の教育といふものは殆んどお話にならんもので、日本維新前の寺子屋教育に等しいもの」³²とレベルの低い朝鮮の教育に改革を起こすのは日本であると述べている。この綱島の視察談はこれらの改革には統監である伊藤の勇断があったとし「教育と司法と行政との大改革が行はれたならば、韓國の民も漸く文明の光に浴することが出来やう」³³と締めくくられている。

1910年、海老名弾正が朝鮮伝道訪問から帰国し、大阪基督教青年館にて行なった「韓國の将来」との講演は、『基督教世界』において「海老名牧師の韓国視察談」という題目で載せられた。ここで海老名は、渡瀬の京城学堂と柳一宣などが専念している女子教育について称

²⁶ 「個人消息」『基督教世界』、第1215号、1906年12月13日、p.8.

²⁷ 1899年に押川方義や本多庸一など日本の代表的なキリスト者によって結成された大日本海外教育会をその設立母体として、1906年に淵澤が朝鮮に渡ったその年まで第二代堂長として渡瀬が運営していた。：尹健次「朝鮮近代教育の思想と運動」、東京大学出版会、1982年、p.211参照

²⁸ 渡瀬常吉「韓國傳道論」『基督教世界』、第1250号、1906年8月15日、p.2.

²⁹ 「政治や教育は慥かに韓人の教化の一方法で、此れが出来得る者とすれば傳道的教化は慥かに出来るのである」渡瀬常吉「韓國傳道論」『基督教世界』、第1250号、1906年8月15日、p.3.

³⁰ 「基督教諸学校に於て昨年中教育せられたる生徒の数は一萬五千人を超えたり。韓國政府及人民は日本官憲の補助によりて諸市、就中首府に於て盛大なる學校を設立したり」と日本の補助による教育が充実していることを報告している。ジュー・ディー・デビス「韓國所感」『基督教世界』、第1263号、1907年11月14日、p.2.

³¹ 1886年設立、初代牧師は小崎弘道

³² 「綱島牧師の韓国視察談(二)」『基督教世界』、第1282号、1907年3月26日、p.5.

³³ 「綱島牧師の韓国視察談(二)」『基督教世界』、第1282号、1907年3月26日、p.5.

賛している。女子教育については「三四年までは殆どなかった高等女学校は盛に勃興しつつある」と述べており、ちょうど1906年に設立された「明新(淑明)女学校」を指している。明新女学校は、1908年に明新高等女学校に昇格され、翌年(1909)には淑明高等女学校に改称³⁴され4年制となったため、1910年に海老名が言及した朝鮮における「高等女学校」は淑明を指していると思われる。

神戸教会の渡瀬牧師が十数年前京城に於て京城学堂なるものを興して数百の青年を教育されたのであるが、(中略)立派な位地を占めて居る。中にも彼の柳一宣氏の如きは京城の六箇の学校に於て千二百人の生徒を薫陶して居る。(中略)渡瀬氏の門下生から出て今奏任官などになって居る者甚だ多い。(中略)女子教育の如きは真に長足の進歩である。三四年前までは殆どなかった高等女学校は盛に勃興しつつある。曾て深窓に閉ぢこめられた婦女子は今是等の学校に於て日新の教育を受けつつある。余は遊戯の人感に多くの女学生がフランス鬼やフートボールをやって居るのを見た。柳一宣氏は韓国に於ける女子の進歩は男女以上であると云っていたが真に其通である。韓国の文明に於ても将来甚だ恐るべきものがある。³⁵

1911年には、渡瀬常吉が淑明女学校が建てられた京城府磚洞に組合教会を建設することを朝鮮総督府から承認を受け教会を設立、それにより日本組合教会と淑明女学校の距離はより近づき、密接な関係が保たれた。³⁶ 再び朝鮮を訪ねた海老名は自ら発行した雑誌『新人』に「朝鮮半島に於ける感想」との記事を載せ、韓国における女子教育の必要性と意図、また淑明女学校など日本組合教会が支えている女子教育の成果について次のように述べている。

朝鮮の女子の坐り方が甚だ見苦しい。あればかりは改善せねばならぬ。所が彼等は日本風に坐するのと、西洋風に椅子に懸けるのと、何れが易いのであろうか。(中略)朝鮮の教化を獨り外國宣教師に一任せず、又日本人が之を分擔し、鮮人をして益々自任せしめつゝあるは、朝鮮の将来に一大光明を放つ所以を思はる。併合以来鮮人の進歩は驚くべきものありと思ふ。彼の女学生の如き、舊来の陋習を打破り、その自由解放を喜び、健気にも勤勉して進展しつつある所、毫も日本の女学生に異ならない。³⁷

³⁴ 「私立淑明高等女学校第一回卒業式」、『毎日申報』、1911年4月8-9日.; 「明新高等女学校の 明新二字を以淑明で 変更」、『皇城新聞』、1909年 7月 2日、3面。

³⁵ 海老名弾正、「海老名牧師の韓国視察談」『基督教世界』、第1389号、1910年4月21日。

³⁶ “日本組合基督教堂 건설,” 『毎日申報』、1911年9月28日, 2面。

³⁷ 海老名弾正、「朝鮮半島に於ける感想」『新人』、第204号、1917年7月号、p.61、64。

このように海老名は、外国人宣教師が担っていた朝鮮における女子教育が、日本による併合以後より進展し、1917年現在の朝鮮の女学生は先に近代化した日本の女学生と変わらないと評価している。この時の朝鮮の女学生とは、組合教会の淵澤が運営している淑明女学校を訪問した印象を述べたのだろう。

また、淑明女学校設立12年を迎えた1918年には校舎を拡張及び新築する計画があり、評議会が開かれているが、この席に校長の李貞淑をはじめ、朝鮮側から趙東潤、嚴柱益が参加し、日本側からは關屋貞三郎³⁸をはじめ渡瀬常吉、松本雅太郎、そして淵澤能恵の名前が記されている。³⁹ 評議会は「大正七年度豫算其他事項を決議し、来年度には學校又所屬土地の経営及び内容の充實を図る為に」⁴⁰ 話し合いがもたれた。そこに、渡瀬、松本、淵澤といった組合教会の主要メンバーがいたことになる。

さらに、京城教会及び淑明女学校に深く関係し、財団法人淑明学園幹事を務めた松本雅太郎は、淑明女学校設立当初から淵澤と共に学校経営に携わってきた組合教会の会員であると同時に、1906年9月1日に日本による植民地支配の道具として初代統監伊藤によって創刊された統監府の機関紙『京城日報』の営業部長として働いていた。ここでも淑明女学校設立及びその後の運営に組合教会と統監府が大きく関与していたことが容易に判断できる。松本は1936年2月に淵澤が天に召された時、長年朝鮮において労苦を共にした者として淵澤の追悼文を『基督教世界』に載せている。そこには淵澤の生涯が紹介され、続いて淵澤が朝鮮に渡った目的が「日鮮婦人の融和親睦を図る」ためであり、朝鮮貴族を紹介され、大韓帝国皇室の援助を受けて淑明女学校が設立されたこと、さらには「内鮮一体を実現」するために努力していたことなどが詳細に記されている。また、淵澤が組合教会婦人会長及び1921年に設立された矯風会京城支部長として活躍していたことも次のように報告されている。

明治三十八年の晩春、(略)京城に止り、朝鮮の實情特に婦人の状態を視て、窃かに殘生を此に献ぐるの使命を感じ、先づ朝鮮の女子教育に着眼し其前提として日鮮婦人の融和親睦を図るの急務を痛感しましたが、時期尚早論多く、容易に其緒に就かず、彼は撓まらず、倦まず、其熱意を訴へ通しましたが、刀自に對する有力なる同情者より彼を朝鮮貴紳の間に紹介せられ、其斡旋盡力により更らに韓皇室の贊助を辱ふするに至りました。

(略)

³⁸ 1875年生まれ、1950年没。日本の官僚として宮内次官、貴族院議員、枢密顧問官等を歴任。1900年に台湾総督府参事官に就任、1910年には朝鮮総督府学務局長、1917年に朝鮮総督府中枢院書記官長兼朝鮮総督府学務局長になる。

³⁹ 「淑明女学校新設」、『毎日申報』、1918年2月20日、2面。

⁴⁰ 同上

嚴妃殿下は今の校地の東側一圓の敷地と其建物を刀自の居宅として下賜せられ、且つ其後援の下に両班の女子教育計畫が漸く實現したのであります。(略)従て容易ならざる苦心、努力を要しましたが、明治三十九年五月二十二日、僅かに五人の両班女子を刈り集めて、明新女學校の開校を見ましたのが今日の淑明女子高等普通學校の出発で今日に於ては五百五十餘人の生徒と二十三人の職員を有し、(略)

刀自は學校創立當初より、朝鮮名門の賢婦人李貞淑夫人と協力し、夫人を推して校長に仰ぎ、自から其下に學監となり同心一體、水魚の交を締し、両老婦人は身を以て如實に内鮮一體を實現して居ました。(略)其後任校長として、學園の内外刀自を推すの切望がありましたが、堅く辭して受けず朝鮮學界に於て學徳高き、前京城大學教授小田省吉氏を推して校長に仰ぎ、自からは依然として學監の位地に甘んじて今日に至りました。(略)

彼は忠信なる信者として、終始一貫其屬する組合教會に忠誠を献げ、其組合教會婦人會長に推され又日本基督教婦人矯風会京城支部の設けられるゝや其支部長に擧げられ、基督教界に於て常に重きを為し、其貢獻亦顕著なるものがありました。⁴¹

上の引用文中の「刀自に對する有力なる同情者より彼を朝鮮貴紳の間に紹介せられ、其斡旋盡力により更らに韓皇室の贊助を辱ふするに至りました。」の同情者とは、菊池謙讓であったことが松本が機関紙『淑明』に残した文章からも明らかである。⁴²

淵澤の死と淑明女學校に於ける校葬に関しては、『基督教世界』においてすぐに取り上げられた。葬儀には松本はもちろん、当時の小田校長、野村副校長、京城教會の大山伝道師、平壤教會の田中牧師、在校生や卒業生が参列し、李王家、齋藤内府、宇垣総督等によって寄贈された花輪が飾られるほど、淵澤は組合教會及び総督府関係者との関わりが深かったと言える。

1918年には淑明女學校が新築事業を推進するが、その事務を決定する財団法人評議會の評議員の中には嚴妃の甥、嚴柱益、朝鮮総督府学務局長である関屋貞三郎、組合教會の渡瀬常吉、松本正実、淑明學園の理事としては淵澤を含め朝鮮総督府学務局の小杉彦治、『京城日報』及び組合教會の松本雅太郎など日本人が圧倒的多数を占めている。⁴³ これら淑明法人の評議員と理事だけを見ても、學校を実質的に支配及び統制しているのは組合教會と朝鮮総督府であることがわかる。

⁴¹ 松本雅太郎「故淵澤能惠子刀自」『基督教世界』, 第2713号, 1936年3月5日, p.5.

⁴² 松本雅太郎「故淵澤能惠子刀自略歴」、『淑明』20号、1936年7月、任展慧「朝鮮統治と日本の女たち」、p.116 参照.

⁴³ 「淑明女學校新建」、『毎日申報』、1918年2月20日、2面.

さらに、この新築事業を支援するため日本の実業家である山本唯三郎が七千円を、「山九運輸」の創業者である中村精七郎が五千円を寄付した。山本は同志社を中退した後、札幌農学校に編入したが、その時新渡戸稲造などから直接指導を受けた。船舶輸送業を通して財閥になった彼は、同志社にも八万円を寄付して図書館(啓明館)の建設費を提供するなど教育事業に関心を見せたが、その過程で同志社女学校出身の淵澤が建てた淑明女学校を支援するようになったのである。彼は「朝鮮の虎」を絶滅させることに影響を及ぼしたことで知られている。このように淑明女学校の設立及び運営過程においては厳妃による財政支援のみならず、日本からの持続的な後援があったことは明白である。

4. 朝鮮統監府・総督府との関係

先述の通り、淵澤の葬儀の場には齋藤内府、宇垣総督等によって寄贈された花輪が飾られていた。齋藤^{まこと}実^{まこと}は、第3代(1919年8月13日～1927年12月10日)及び第5代(1929年8月17日～1931年6月17日)の二期にわたって朝鮮総督を務め、後に第30代(1932年5月26日～1934年7月8日)内閣総理大臣となる。さらに、齋藤の妻春子は東洋英和学校で淵澤が教えていた頃の教え子で、齋藤夫妻とも親しい仲であった。ここでも、淵澤——組合教会——朝鮮総督府との親密なつながりを知ることができる。

また、淑明女学校は他の私立学校とは異なり、当時朝鮮にあった朝鮮統監府が立ち上げた官立女学校と同じ位置に置かれていたことが次のような記事から読み取ることができよう。

「●両婦人学校観覧」

西洋婦人二名が昨日上午十一時頃に學部に前往し、學務第二課長隈木繁吉氏より紹介を請求し官立高等女學校及磚洞明新女學校と師範學校を觀覧した。⁴⁴

さらに淑明女学校が設立された当時、日本の華族から寄付を受けていたことも記されている。

「●義捐明新」

日昨に長谷川大將が磚洞明新女學校を觀覧し五拾圓を出捐した。⁴⁵

過日来入京滞在中徳川公爵同侯爵及松平伯爵が當地左記各所に金額を寄附したもの

⁴⁴ 「両婦人学校観覧」、『皇城新聞』、1909年、6月22日、1面.; 隈木繁吉の名字は「隈本」が正しい。

⁴⁵ 「義捐明新」、『大韓毎日申報』、1907年3月23日、2面。

は如左である。(略) 一 金 三百圓 磚洞明新女學校⁴⁶

五月六日 寄金奨學入京滞在中に徳川公爵と松平伯爵諸氏が孤兒院婦人養蠶會明新女學校養閨義塾に各二三百圓ずつ寄附した。⁴⁷

ところで、京城学堂の渡瀬は、当時の朝鮮統監であった伊藤とその教育観に自分とは異なる部分があると批評しているものの⁴⁸、手段の相違による教育観の違いであり、根本的に朝鮮人を教化し「日韓同化東洋文明の為に」⁴⁹ 植民地支配が必要であるとの見解は同じであった。統監府が設置されてから、『基督教世界』では伊藤統監の近況を報告しながら統監府との関わりを報告している。⁵⁰ 1907年発表された組合教会の宣教師J.D. ディヴィスの報告によると、官立及び宣教師が設立した諸学校より六千人の生徒たちが集まり運動会が催された際には、まだ幼い韓国の皇太子をはじめ伊藤統監、長谷川好道將軍(後に、第二代朝鮮総督に就任)及び多くの日韓の大臣たちが臨席していた。⁵¹ 同年、磚洞明新女学校では「日本愛国歌」を斉唱⁵² したことを見ても、淑明(明新)女学校の設立目的と運営が当初から日本に同化させる方向性を持っていたことがわかる。さらに、同年5月25日に、各女学校連合大運動会が京城の奨忠団で開かれたが、「唯獨」明新女学校のみが不参加であった。⁵³ これは奨忠団という場所が明成皇后殺害事件(1895)当時、王后を最後まで守り結局殺された朝鮮の將軍たちを記念した空間であるため、明新女学校設立を裏で操った菊池謙讓が明成皇后殺害事件に関与していたことから、関係上、参加しなかった可能性もある。政府官僚以外に

⁴⁶ 「三爵寄附」、『大韓毎日申報』、1907年5月4日、2面。記事にある徳川公爵とは、徳川家達^{いんさくと}で1884年の華族令公布により公爵の爵位が与えられる。また、松平伯爵は、松平直之で1907年に伯爵を襲爵している。

⁴⁷ 「時報」、『西友』、西友学会発行、第7号、1907年6月1日、p.41。

⁴⁸ 「渡瀬氏は韓國の風俗政治教育の一般を擧げ来つて韓國教化の使命に及び、大に伊藤侯爵の韓國に對する政策を批評して自己の主張を詳らかにし、之を全ふするに宗教道徳を以てせざるべからず、韓人を威服せしむるにあらずして心服せしめざるべからず、斯くして韓人の品性を高め暖かに指導して彼の地開拓の實を擧げ得べしと論結し」と、渡瀬は風俗や政治を強調する伊藤に対し、宗教(キリスト教)によって朝鮮人の心から同化させるべきであると主張した。「宮崎集注傳道報告」『基督教世界』、第1227号、1907年3月7日、p.9。

⁴⁹ 渡瀬常吉「韓國傳道論」『基督教世界』、第1250号、1907年8月15日、p.3。

⁵⁰ 例えば、劍持生「韓國通信一宣教師伊藤統監訪ふ」『基督教世界』、第1237号、1907年5月16日、p.10.、「伊藤統監と外国宣教師」『基督教世界』、第1243号、1907年6月27日、p.9.など。

⁵¹ ジェー・ディー・デビス「韓國所感」『基督教世界』、第1263号、1907年11月14日、p.2。

⁵² 「近日 박동명 新女學校에서 愛國歌는 日本愛國歌를 唱하고,」 「筆下層欄」、『毎日申報』、1907年 4月5日、2面。

⁵³ 「昨日奨忠壇에서 各女學校聯合大運動을 舉行하는데 惟獨明新女學校는 進參치 아니하얏다더라,」 「雜報」、『大韓毎日申報』、1907年5月26日、2面。 ; しかしその翌月、奨忠団で明新女学校だけが別に運動会を開催する。(「女校運動」、『大韓毎日申報』、1907年6月11日、2面.); ところが1908年になると、「北署農商所」という政府警務機関の運動場で運動会が舉行される。(「明新運動」、『皇城新聞』、1908年 5月 5日、1面。)

も、日本商業学校校長であった井手力之助が京城を訪ねた際に淑明高等女学校を視察し、日本との密接なつながりを持つ女学校に特別な関心を見せた。⁵⁴

京城教会初代牧師である剣持や一時的に朝鮮に滞在した綱島と統監府関係者との関わりも先述の通りであり、さらに京城学堂出身で渡瀬の愛弟子であった柳一宣^{ユイルソン}が淑明女学校の教務主任を務めていたこと⁵⁵などを考えると、京城学堂から渡瀬が退任したその年、淵澤が組合教会及び統監府との関係を背景に淑明女学校を立ち上げたと言っても過言ではないだろう。

では、なぜ淵澤は組合教会会員であり矯風会会員であるにも関わらず、キリスト教学校の設立を望まなかったのかについては、村上淑子によると「韓国ではキリスト教が以前から広く布教されていて、多くの信者がいました。そうした背景のもと、外国人宣教師によるミッションスクールも数多く設立されました。そうしたなかで、日本式の教育の場が五六歳になった能恵の双肩にかかっていた」⁵⁶とされる。実際に、淵澤の徹底的な「日本式教育」は「日本語専用教育」に繋がり、1909年に韓国人学務局長の前で行われた明新女学校の授業でも、ただ日本語のみ使われ、それに対する批判記事が『皇城新聞』に載せられた。

日語主張、磚洞明新女學校にて再昨日に受業式が設行されたが、(……)何許生徒は日語のみを使用して答辭し、其次には兩生徒が日語を使用して韓國語で翻譯した。該校は日本人の學校なのか、日語のみを主張すると、批評が有する。⁵⁷

これが本当であれば、淵澤はキリスト教信仰よりも日本語による「日本式教育」を優先させたことになる。総督府や朝鮮王室(大韓帝国皇室)との関係を維持していた淵澤にとって、優先順位としてあげられるのはまず「日本」であり、日本人との関係(朝鮮総督府や組合教会関係者)、そして彼らを通して与えられた朝鮮王室との関わりであった。そこには、確かに朝鮮の女子教育に対する熱い思いと同情という「良心的」な動機があったにせよ、矛盾を解決できないまま無意識のうちに日本の侵略行為に対する無批判的な姿勢があったと言える。

結局、組合教会及び総督府との関係上、総督府の植民地化政策に反対してまでキリスト教学校を設立させるという判断は淵澤にはできなかった。この無意識のうちに朝鮮統治に荷担している状況について、太田は、淵澤が「日本語で授業することはもちろん、朝鮮語を知らずに教壇に立つことに、何の疑問も恥じらいも持っていないようである。自身がアメリカで

⁵⁴ 「日本商業学校長視察」『皇城新聞』1908年9月23日、2面。

⁵⁵ 飯沼二郎、韓哲曦『日本帝国主義下の朝鮮伝道』、日本基督教団出版局、1985年、p.116-117.、及び韓哲曦『日本の朝鮮支配と宗教政策(朝鮮近代史研究双書6)』、未来社、1988年、p.102. 参照

⁵⁶ 村上淑子『淵澤能恵の生涯—海を越えた明治の女性—』、原書房、2005年、p.78-79.

⁵⁷ 「日語主張」、『皇城新聞』、1909年 3月 27日、2面。

英語を初歩から習った経験はどのように生かされているのだろうか。自らの異文化体験を反映する言及が、淵澤の残した文章に全く見られないのは残念なこと⁵⁸と、その姿勢を批判している。

淵澤は、自ら朝鮮に渡った理由を『婦女新聞』⁵⁹に「内鮮融和のために」と題して「内鮮親善の心を以て」、「お互いが融和し、親しむ様、そのために一生を捧げる」⁶⁰と後に語っている。また、同じく『婦女新聞』で紹介されている淵澤に関する記事には、「事実上、朝鮮人の思想は露国に傾いて居りました。其の際女史は、日韓婦人會を組織して両国婦人の接近を図られましたが、(略)翌年故伊藤公が朝鮮の統監になられましてから、種々の便宜を得て、朝鮮婦人を啓発するにはどうしても女学校を設けねばならぬといふので、明新女学校を設立せられました」⁶¹と統監府から便宜があったことが記されている。淵澤は、はじめて朝鮮に渡った時に出会った、外出することも困難な朝鮮の女子について不憫に思いつつ、娘時代を過ごすことなく早婚してしまうことを問題視し、「昨今は併合後の新影響として在来の風俗も少々改まつて来ましたがまだまだ却々舊習は脱しませぬが一とつ喜ばしいのは娘達が内地人の妻女として結婚するのを喜ぶ有様になりましたことです」⁶²、との談話を残すほど朝鮮人を日本に同化させることによって「不憫な朝鮮の女子」を救うことができると考えていたのだろう。また、自らの朝鮮での教育活動について回顧しながら、1917年に淵澤自身が次のような記事を『婦人新報』に寄せている。

彼地に私が参りました頃は朝鮮の教育は少しも進まず、日本語を教へる處は一としてありませんでした。然し語学は親しみの本である、言語が通じなければ互いに心を知る事は出来ませぬ。

そこで、一方ならぬ苦心の後漸く五人の生徒を以て邦語学校を開き、賢姫殿下を願つて日韓婦人会を開き、又李氏といふ貴婦人を校長として今の淑明女学校を設立しました。⁶³

朝鮮での女子教育を通して「内鮮融和」を果たすために淵澤が重要視していたこととして

⁵⁸ 太田孝子「植民地下朝鮮における淑明高等女学校：抗日学生運動を中心に」、岐阜大学留学生センター『紀要』、2003年、p.30.

⁵⁹ 1900年、一青年教師であった福島四郎によって創刊され、1942年まで約42年間にわたって刊行された週刊新聞である。主に中等階級の女性を対象にその啓発をめざして刊行された。『「婦女新聞」と女性の近代』、不二出版、1997年、p.3.

⁶⁰ 淵澤能恵子「内鮮融和のために」、『婦女新聞』、第1358号、1926年、6月20日、p.8.

⁶¹ 「朝鮮婦人の慈母たる淵澤女史」、『婦女新聞』、第902号、1917年、8月31日、p.7.

⁶² 扇谷亮『娘問題』、日高有倫堂、1912年、175頁.

⁶³ 淵澤能恵子「朝鮮に於ける女子教育」、『婦人新報』、第240号、1917年、7月10日、p.8.

まずあげられることは、支配層との関係維持であった。その中でも淵澤の精神的土台となった忠君愛国・皇室崇拜の念は、出身の岩手在住時代に築かれ、淵澤は「日刊新聞紙に、陛下や殿下方の御写真が出てゐるのを見ると、必ず切抜いて、菓子箱の古いのにためておき、何かの式日に朝鮮神宮参拝の折、それを納めるのが例だつた。御写真の載つてゐる新聞を跨いだりするおのがあると聲を荒くして叱つた」⁶⁴ ほど、皇室を慕う思いは強かつた。⁶⁵

しかし、これは何も淵澤だけに言えることではなく、当時の『婦人新報』を見ると、片野真佐子がこの時期の矯風会のキリスト教理解の背景について指摘する通り、「婦人矯風会は、結成当初から皇室に熱烈なエールを送り、みずからの運動を正当的で権威あるものとする意識を強固にし」⁶⁶ た。さらに片野は、「日清戦争下、婦人矯風会会誌は『仏国新聞』から、神功皇后が『支那の開化』をもって国の指標を示したとすれば、現皇后は『欧米の文明』をもって国民を誘導すると美子皇后称賛の声を紹介したが、はからずも婦人矯風会自身の行動論理がここに代弁されている。婦人矯風会の皇后賛美は欧米文明の受容と分かちがたく結びついて理解されたキリスト教の信仰に支えられている」⁶⁷ と結論づけている。同じく、早川紀代も矯風会初代会長の矢島楫子が「矯風会の活動も天皇・皇后の仁意を具体化するものであるという皇室尊奉を示して」⁶⁸ おり、矢島や守屋東はその傾向が強く、『婦人新報』にも皇室に関する記事が多数掲載されていることを指摘している。矯風会は、皇室など当時の支配層との関係を維持すること、それがキリスト教宣教における最適且つ有効な手段であると捉えていた。

このように皇室を慕う思いと、組合教会や統監府の関係者との協力体制が淵澤にとっては「内鮮融和」のために最も有効な手段であり、「内鮮融和」こそがキリスト教伝道のためにも生かされる道であると考えていたのだろう。

1913年には淑明女学校と進明女学校が朝鮮総督府から教育勅語を直接下賜されたが、李貞淑、淵澤能恵、松本雅太郎、3人が京畿道庁に行き直接もらった。これは私学としては最初

⁶⁴ 「故淵澤女史逸話(二)」『婦女新聞』、第1864号、1936年3月1日、p.8.

⁶⁵ それ以外にも、彼女が残した文章として次のようなものがある。「自分で常に憂へて居る事は、文明が進むにつれて皇室を尊ぶ心が薄くはならぬかと云ふ一事です。近くは支那の如き又ロシヤの如き、実に恐る可きことと思ひます、然し我が国は二千五百年來の連綿たる皇室ですから世々に榮えます事は決して偶然でないと思ひます、私共は神より与へられし皇室を守り、共に国を守つて行きたい、内が堅固なれば外より如何なる圧迫を受けても容易に敗れるものではありません。どうか内を堅固に守りたいもので御座います」：淵澤能恵子「朝鮮における女子教育」『婦人新報』第240号、1917年7月10日、9頁。

⁶⁶ 片野真佐子「一八九〇年代における女性団体の動向—四大婦人会をめぐる」、井桁碧編『日本「国家と女」、青弓社、2000年、56頁。

⁶⁷ 同書、82—83頁。

⁶⁸ 早川紀代「帝国意識の生成と展開—日本基督教婦人矯風会の場合」、富坂キリスト教センター編『女性キリスト者と戦争』、行路社、2002年、p.151.

の出来事であった。⁶⁹

1915年には朝鮮総督府学務国が、京城ホテルにて淵澤の勲章授与を祝う晩餐会をも開催してくれた。⁷⁰ そして、1921年に朝鮮支部が設立された矯風会の活動においても淵澤と総督府との関わりが次のような記事によって明らかになる。

淑明女子高等普通学校学監淵澤能恵女史を会長とする日本基督教婦人矯風會京城支部において例年同様陰暦年末を迎え貧困に嘆く不憫な人々に救済米を送った……(略) 二七二日淑明女子高等普通学校校庭にて総督夫人を為始して各会員の手によって午前十時から午後三時まで各々配布することとなった。⁷¹

(略) 婦人矯風會京城支部長淵澤能恵氏等が協力し公娼廃止運動の促進に努力する一方、総督に請願書を提出することを決定した。⁷²

さらに、淵澤が朝鮮で教育活動に従事していた当時、総督府と淵澤の関係をよくあらわしている新聞記事が掲載されている。

「●教育會女子懇親會」

朝鮮教育會附設教育俱樂部にて来八日午前九時半から京城内に官公私立各學校女子教師六十餘名を會合し懇親會を開いた。当時は宇佐美内務部長官檜垣長官有賀理事長等が出席し一場の禮辭が有り女教師側からは私立淑明女子高等普通學校學監淵澤能恵氏が答辭を述べた後一同が紀念撮影をして各種餘興も行われた⁷³

1915年には勲六等の勲章が淵澤に下賜され⁷⁴、1925年には京城教育總會から「功績者5名」中の一名に選ばれ⁷⁵、朝鮮総督府が1910年から35年までの25年間、朝鮮の植民地統治の

⁶⁹ 「教育勅語奉戴式灰、私立では此が嚆矢」、『毎日申報』、1913年 3月 20日、2面。

⁷⁰ 「淵澤女史祝賀会」、『毎日申報』、1915年10月28日、2面。

⁷¹ 「基督教婦人矯風會 貧民に施米 二十二日淑明女学校にて 総督夫人も進参」、『毎日申報』、1933年1月22日、2面。

⁷² 「公娼廢止請願提出◇総督府へ」、『毎日申報』、1927年2月19日、2面。

⁷³ 『毎日申報』、1914年、3月7日、2面。文中の宇佐美内務部長官は、1910年10月1日から1919年8月19日まで朝鮮総督府内務部長官をしていた宇佐美勝夫のこと。檜垣長官は、当時朝鮮総督府京畿道長官の檜垣直右。また、有賀理事長は、朝鮮教育會附設教育俱樂部理事長であった。

⁷⁴ 「敍勲六等授寶冠章」, 「敍任及辭令敍任及辭令」, 『官報』, 大正4年(1915) 9月 21日, 6面.; “淑明女校老女史의 영예, 淵澤能恵 여사에게 勲章下賜,” 『毎日申報』, 1915年 9月 23日.

⁷⁵ “京城教育總會、功績者五名決定、” 『朝鮮新聞』、第8473号、1925年 3月 29日.

ため貢献した2,913人をまとめた『朝鮮功勞者銘鑑』(1935)に淵澤も登場している。淵澤が召される一年前に出版されたこの書物に、「86歳、巖妃を総裁にして日韓婦人会の組織を創設、淑明女子高等普通学校創設、愛国婦人会の役員と矯風会朝鮮会長などに推戴される。現在勳六等」⁷⁶と記録されている。これは淑明女学校の創設をめぐる愛国婦人会及び矯風会など日本の政治界と宗教界が深く関わっていることをよく示している。

また、1936年2月に淵澤の葬儀が終わった三か月後、京城教会は海老名弾正⁷⁷夫妻を朝鮮へ招待し礼拝説教や講演を依頼した。この時、組合教会を代表して歓迎の挨拶をしたのが淵澤と共に淑明女学校を運営してきた松本雅太郎であった。海老名の講演会には当時の渡邊総督府学務局長自ら講演題目を紹介した場面も報告されている。また、当時の宇垣朝鮮総督は海老名夫妻を午餐会に招き、総督府講堂において海老名に講演を依頼している。海老名はこの朝鮮旅行の際に淑明女学校にも訪れ淵澤の旧宅に安置されている遺骨に敬意を表し、小田校長をはじめ学校職員と懇談、その後には組合教会の役員その他と晚餐会を持ったことが記録されている。⁷⁸ さらに『京城日報』にも淵澤の訃報はその死の翌日に「生涯を教育に捧げ淵澤女史は逝く在鮮卅年間の功績」及び「朝鮮女性の母尊い教育の一生逝ける淵澤能恵子女史」と題して二度にわたり掲載された。⁷⁹ ここでも淑明女学校と組合教会及び総督府との関係の深さを見ることができる。

4. おわりに

以上、村上の著書や淑明女子大学校から発行された『淑大學報』などは、淵澤が淑明女学校を設立した目的を、朝鮮での女子教育の必要性を痛感して実行したわけで政治的な動機はまったくなく、韓国における女子教育の遅れを純粋に嘆いたから⁸⁰とするが、本発表論文における考察によって、矯風会と組合教会、朝鮮統監府と総督府との関係が明らかにされ、1910年の韓国併合前から侵略の流れの中にあっただことがわかる。さらには、組合教会の渡瀬常吉や松本雅太郎及び渡瀬の教え子である朴成圭⁸¹が女学校の内部計画を立て、愛弟子の

⁷⁶ 朝鮮功勞者銘鑑刊行會、『朝鮮功勞者銘鑑』, 京城, 1935, p.821.

⁷⁷ 熊本洋学校に学んで入信、卒業後同志社に入学、新島襄に師事した。安中教会、本郷教会の牧師、同志社大学総長(1920年—1928年)などを歴任した。

⁷⁸ M・M生「海老名先生の来鮮」『基督教世界』, 第2724号, 1936年5月21日, p.2.参照

⁷⁹ 「生涯を教育に捧げ 淵澤女史は逝く 在鮮卅年間の功績」『京城日報』, 1936年2月9日, p.2. 及び「朝鮮女性の母尊い教育の一生 逝ける淵澤能恵子女史」『京城日報』, 1936年2月9日, p.7.

⁸⁰ 村上淑子『淵澤能恵の生涯—海を越えた明治の女性—』, 原書房, 2005年, p.74. 及び、編集室「民族私学 淑明の精神と伝統」、『淑大學報』, 第23号, 1983年, p.183.、ジョンクムジュ「誇らしい雪花紋の母校 淑明女子大学校」、『淑大學報』, 第23号, 1983年, p.179-180.など。

⁸¹ 本貫は順天。1897年に京城学堂入学し、1900年卒業。私立龍山学堂教員、日本人郵便局通事事務員、日本人京城公立小学校教授、大東新報社韓字報主筆、外国語学校副教官、官立漢城師範学校教官などを歴任した。: 国史編纂委員会編『大韓帝国官員履歴書』(韓国史料叢書第17集)、探求堂、1971年、p.215.

柳一宣^{エイロン}が教務主任として学校に関わったこと、また緑旗連盟婦人部長である津田節子⁸²を淑明女学校日本語教師として採用したことなどからも明らかなように、淵澤の設立目的に全く政治的な意図がなかったとは到底言い難い。石井智恵美が指摘するように、「能恵の主体的動機は、韓国の女性たちへの素朴な同情、お国に役立ちたいというナショナリズム、自活の道を探していたことの三つが挙げられ」⁸³、淵澤は「良心的」に朝鮮の女子に同情し、素朴な気持ちを持っていたのだろう。ただ、それは「隣人への愛の発露として働き、多くの人に感化を与えると同時に、植民地支配の矛盾を覆い隠す欺瞞的な役割を果たす力」⁸⁴となってしまった。このことは、淵澤を取りまく矯風会、組合教会、朝鮮統監府・総督府との強いつながりを抜きにして語ることはできない。

本研究発表において、淑明女学校設立及び運営における周辺関係を詳細に調査することにより、確かに矯風会や組合教会を通して朝鮮統監府・総督府の助言や援助があったことが明白となった。したがって、朝鮮における女子教育の必要性を求めたという淵澤の女学校設立目的は、日本の目的である植民地支配という大きな波の中に埋もれていたと言っても過言ではなからう。

(かみやま・みなこ 関西学院大学大学院神学研究科博士後期課程)

⁸² 1902年に父塚本道遠、母ハマの二女として生まれる。良心の影響によりクリスチャンとなる。1924年に長兄の親友津田栄と結婚し、京城帝国大学新設にともない赴任する夫と共に朝鮮に渡った。節子は、淑明女子高等普通学校の教員として日本語を教え、講演部と図書部の指導も行った。栄が緑旗連盟を創立したときから同婦人部長を務めた。緑旗連盟は、「日本の天皇を中心として、あらゆる民族、あらゆる文化を綜合統一し生成発展せしめ、それによって世界人類の楽土を建設せん」という主旨のもとに結成されたファシズムの思想団体のひとつで、日本国体精神による社会教化と思想研究を事業内容としていた。「内鮮一体の実践」を運動方針の冒頭に掲げている緑旗連盟の結成は、総督府の「心田開発」運動と切り離して考えることはできない。：任展慧「朝鮮統治と日本の女たち」、もろさわようこ編『ドキュメント女の百年5－女と権力』、平凡社、1978年、p.130.

⁸³ 石井智恵美「淵澤能恵と『内鮮融和』—日本の朝鮮統治下における女性クリスチャンの一断面—」、『基督教論集』、第35号、1992年、p.81.

⁸⁴ 同論文、p.85.